東京語の動詞・複合動詞アクセントの生成について

劉佳琦（リュウ　カキ）liujq@akane.waseda.jp

1．はじめに

今まで、中国語母語話者を対象に行った東京語アクセントの習得研究は多く、鮎澤(1995、1997、1998)、鮎澤他(1997)、長友他(1993)、カッケンブッシュ・戸田(1999)などの研究が挙げられる。以上の先行研究はいずれも北京語話者を対象に、中国普通話の四声が東京語アクセントの習得に与える影響について調査を行っている。しかし、上海語の声調は北京語とは異なり、東京語アクセントを習得する際に見られる母方言干渉の研究はまだなされていない。また、東京語の動詞アクセントに関する習得研究も少ない。

本研究では、中国語母語話者(北京・上海)を対象に、東京語の動詞(辞書形および活用形)・複合動詞(動詞＋動詞、以下 V1＋V2)アクセントの生成調査を行い、東京語母語話者に評価してもらった。学習者の音声データおよび日本語母語話者の評価に基づき、分析をした。その結果を踏まえた上で、アクセント規則の適切な導入方法および注意事項について検討し、日本語音声教育に還元する。

2．生成調査

2-1 調査協力者

中国語母語話者：中国(北京・上海)の大学の日本語学科に在籍している日本語学習者各 2 名に協力してもらった。学習歴は 2 年である。

東京語母語話者：東京都出身の日本語母語話者 3 名に協力してもらった。

2-2　調査内容

動詞の辞書形および活用形のアクセントの生成調査の調査内容：アクセント式が平板式・起伏式、5 段・1 段の 2 拍・3 拍・4 拍語の動詞 8 語を選定した。また、辞書形および「ない」形、「て」形、命令形、条件形、可能形、受身・尊敬形、使役形、「ます」形、意向形の 9 つの活用形を調査内容とした。調査内容の一例は表 1 のとおりである。

表 1　動詞の辞書形および活用形の調査内容の一例(辞書形と「ない」形)

	平板式動詞			起伏式動詞				
	5 段動詞						1 段動詞	
	2 拍語	3 拍語	4 拍語	2 拍語	3 拍語	4 拍語	3 拍語	4 拍語
辞書形	いう	わらう	おこなう	よ□む	やす□む	てつだ□う	おり□る	かなえ□る
ない形	いわない	わらわない	おこなわない	よま□ない	やすま□ない	てつだわ□ない	おり□ない	かなえ□ない

複合動詞アクセントの生成調査の調査語：「V1＋V2」タイプの複合動詞を調査語とした。V1、V2 がそれぞれ 0 型と-2 型アクセントの単語を選定した。パターンＡ(0 型＋0 型→-2

型)、パターンＢ(-2 型＋0 型→-2 型／0 型)、パターンＣ(0 型＋-2 型→-2 型)、パターンＤ(-2 型＋-2 型→-2 型／0 型)の各 2 語、計 8 語を調査語とした。調査内容の詳細は表 2 のとおりである。

表 2　複合動詞の調査内容の一例(パターンＡの場合)

パターンＡ	0 型	あらう	＋	0 型	おわる	→	-2 型	あらいおわ□る
		いう			はじめる			いいはじめ□る

2-3　**調査手順**

生成調査：日本語学習者である北京・上海方言話者各 2 名および東京都出身日本語母語話者 1 名に、ランダムに並べ替えた調査内容シートを提示し、その発音を録音した。生成調査の所要時間は各協力者につき 15 分である。本研究の録音機はSONY PCM-D1、マイクロフォンはSONY ECM-MS957 を使用した。音声分析ソフトはCoolEdit96、SUGI SpeechAnalyzerを使用した。

評価：学習者の音声データは音声分析ソフト(CoolEdit96)を用いて切り分け、ランダムに並べ替えて、評価用CD4 枚(約 40 分)を作成した。評価シート(表 3)とともに日本語母語話者に渡し、学習者のアクセントが「自然か不自然か」の二者択一で評価してもらった。また、評価シートに学習者の生成するアクセントパターンに関するコメントを記入してもらった。

表 3　評価シートの一例

調査語	アクセントの評価		**コメント欄**
1.　言おう（いおう）	**〇自然**	**〇不自然**	

2-4　**調査結果と考察**

2-4-1　**東京語の動詞(辞書形および活用形)アクセントの生成について**

東京語の動詞(辞書形および活用形)アクセントは、1)一つの規則が適用するタイプ、2)二つの規則が適用するタイプの二つに分けられる。動詞連用形「ます」と意向形「う・よう」は、1 つの規則だけでアクセントが予測できる活用形であるため、生成調査の結果では正答率が高く、早期習得されると予想できる。しかし、二つのアクセント規則が適用するタイプに関しては、学習者が習得する際、規則を理解していても、ある語が平板か起伏かという情報を 1 語 1 語覚えなければならないため、混同することが多い。以下では、調査結果の詳細について述べる。

１）動詞辞書形の場合は、東京語の動詞アクセントはすべて 0 型と-2 型の 2 パターンである。規則は簡単なように見えるが、生成調査の結果では、学習者にとっては動詞辞書形のアクセントの習得は容易なものではないということが分かる。特に、平板式動詞を起伏式の-2 型アクセントで発音されること(例：わらう→わら□う)が多く見られた。この結果から中国語母語話者にはピッチを平坦に保つことが困難であり、ピッチが下降する傾向があることが明らかになった。これは、各音節に声調が付与される中国語の音韻特徴からの転移なのか、-2 型はアクセント習得の際の普遍的特徴なのかを明らかにするために今後の調査が望まれる。

２）動詞条件形、可能形、受身・尊敬形、使役形の場合は、二つのアクセント規則が適用される。二つのアクセント規則を混同したため、どちらかのアクセントグループは正答

率が高いが、もう一つは正答率が低いことが分かった。発音誤用例(使役形の場合)：「わらわせる」→「わらわせ□る」。指導時に、ただアクセント規則を導入するだけでは不十分であることが示唆されている。

３）動詞未然形(「ない」形)の場合は、平板グループと起伏グループに分けられる。生成調査の結果では、正答率が全体的に低いものとなった。また、北京方言話者と上海方言話者の間に生成の誤用パターンの差異が見られた。北京方言話者の場合は、平板式 3 拍 4 拍語動詞のアクセントには、起伏式動詞のアクセント規則を適用していて、誤用が多く見られた。誤用例：おこなわない→おこなわ□ない。だが、上海方言話者の場合は、起伏式動詞のアクセントはすべて「～ない」の「な」で下がっていて、たとえば「やすま□ない」→「やすまな□い」、-2 型になっているというような誤用が多く観察された。

2-4-2　東京語の複合動詞アクセントの生成について

まず、単独動詞(特に平板式動詞)のアクセントが不正解であっても、複合動詞になる場合、自然なアクセントで発音されることが観察された。また、パターンＡＢよりパターンＣＤのほうが正答率が高く、つまり V2 が-2 型アクセントの場合、生成しやすいのである。さらに、学習者の音声では「一つの単語においてアクセント核が 2 箇所にある」などの誤用が観察された。指導時、東京語アクセントには存在しないような誤用を避けるには、「アクセントの下がり目は後ろから 2 拍目の 1 箇所だけである」ということを強調すべきであろう。

3．まとめと今後の課題

本研究では、中国語母語話者(北京・上海)を対象に、動詞の辞書形および 9 つの活用形および複合動詞(動詞＋動詞タイプ)のアクセントの生成調査を行い、容易に習得できる部分と習得が困難な部分さらに誤用パターンの傾向が示唆された。その結果を踏まえた上で、アクセント規則の適切な導入方法および注意事項について検討した。動詞・複合動詞アクセントの指導は、規則を導入するだけでは不十分であり、学習者の音声生成時に起こりうる混同や誤用パターンを予め念頭に置き、規則導入時に注意事項として指導する必要性があることが示唆された。

今回の調査は予備調査であるため協力者が少なく、一般化した結論を導き出すことは難しいが、本調査では協力者数を増やして調査を行うつもりである。

参考文献

秋永一枝(2001)**「東京アクセントの習得法則」『新明解日本語アクセント辞典』三省堂**

鮎澤孝子(2003)**「外国人学習者の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』第** 7 **巻第** 2 **号，日本音声学会，**47-58

松崎寛・河野俊之(2005)**「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』**125 **号，日本語教育学会，**57-66